

「回想」

飛騨地区柔道協会

会長 青豆 善行

私が柔道と出会ったのは小学校5年生の時でした。近所のおじさんから「青豆君、おじちゃん柔道着貸してやるで柔道やらんか？」と誘われたのがきっかけでした。夜に友達と一緒に遊ぶことができるという不純な動機で柔道を始めました。当時は少年野球もやっており、柔道と野球の二刀流でスポーツに明け暮れる毎日でした。

中学校では、野球をしたいと思いましたが、少年野球の仲間たちのほとんどが私とは別の中学校に行ったため、勇気がない私は野球部の入部を諦めました。次の選択肢として柔道がありましたが、苦しいイメージしかなかったため、結局は先輩に誘われハンドボール部に入りました。入部して間もなく父親から「何で柔道を最後までやらのや！」と叱られ、しぶしぶ柔道部に転部しました（野球をやっていたら今頃どうなっていたのか？とよく考えます）。

高校は斐太農林高校（現飛騨高山高校）に入学し、何となく入った柔道部でしたが、そこで運命の出会いがありました。それは、宇田富晴先生との出会いです。当時、宇田先生は日本体育大学を卒業され、新任教諭（体育）として赴任されて4年目でした。大学時代は相撲部で活躍し、インカレ団体戦優勝などの輝かしい戦績も残されました。大学生の時にはプロからも声が掛かるほどの選手だったそうです。そんな先生が顧問ということで、最初は「しまった！」と思いましたが、毎日の部活動で接していくなかで、だんだんと宇田先生の人柄に惹かれ、柔道に打ち込むことが楽しくなっていました。また、宇田先生は相撲が専門だったため、上手く丸め込まれ柔道部員は柔道と相撲の両方で大会に出場していました（相撲場の横で女子テニス部が練習をしていたため、廻しをするのがとても恥ずかしかったのを覚えています）。

高校三年の就職試験では岐阜県警の採用試験を受けましたが、2次試験で不合格となりました。この時、県内柔道経験者の同期では3人受験しましたが、不合格は私一人でした。ちなみに、合格したのは現在県柔道協会理事長の八代洋一先生、全日本柔道選手権に出場した奥田富美夫先生です。私は、「さすが岐阜県警の面接は見る目がある！」と感心したと同時に、「見る目がないな」とも思いました。その後、進路に悩む私に宇田先生が進学を奨めてくれました。最初は、半信半疑で話を聞いていましたが、先生の「実技試験があるので、もしかしたら受かるかも？」この言葉に乗せられて、宇田先生と二人で両親を説得し、日本体育大学を受験することとなりました。

なんとか日体大に入学した私は、柔道を専攻し合宿所に入りました。柔道部員は160人を超え、第一合宿所、第二合宿所、寮、下宿に分かれて生活をしていました。私は大所帯（約90人）の第一合宿所入り、上下関係の厳しい生活が始まりました。1年生は、当番（食当）制で90人分の朝・昼・晩の食事を作ります。これがまた大変で、17部屋からくる雑用も

あり、てんてこ舞いの一日を過ごします。授業、練習以外の時間は、朝から晩まで（起きてから寝るまで）先輩の世話（雑用）をしながら、1年生（奴隸）から2年生（平民）になる日を待ちわびるのです。地獄のような毎日でしたが、今思うと、合宿所での生活は私の人生にとって貴重な経験となっています。

大学4年生の夏、教員採用試験を受けました。勉強不足であった私は当然のことながら不合格でした。卒業後には講師をしながら、毎年惰性で採用試験を受けていましたが、4度目の挑戦でやっと合格しました。この年は、保健体育の採用人数が近年になく多い年だったこともあり、運にも恵まれたのです。私には無理だと思っていた採用試験に合格した時は、改めて「感謝」という言葉を身を持って感じました。

柔道を通して多くの人と出会い、そしてその人たちから支えられ多くのことを学ぶことができたことを、本当に幸せに感じ感謝しています。これからは、自分の歩んできた人生をベースに、子供たちや柔道の愛好者たちの背中を後押しできるよう努力していきたいと思っています。